ひょうご水百景

No.145　八木川（養父市八鹿町八鹿）

～「大正ロマン漂う町」が伊勢湾台風で被災～

写真-1 新町橋から八木川沿いの酒蔵を撮影（令和３年11月）

■ アングルを変えても絵になる～八鹿の町並みのシンボル「酒蔵と煉瓦煙突と八木川の流れ」

写真-1 は、養父（やぶ）市役所近くの八木川に架かる新町橋から、旧養父郡酒造の酒蔵（仕込蔵）を撮ったものです。清流八木川に面して、漆喰（しっくい）と焼杉板の外壁を持つ酒蔵と赤い煉瓦でつくられた丸い煙突。八鹿の町並みのシンボルはアングルを変えて眺めても絵になります。

令和３（2021）年 10 月、ネットを検索していて、八鹿地区自治協議会（以下「自治協」という）の機関紙「ふるさと通信」第 103 号（令和２年８月発行）に「八鹿市街地の八木川護岸工事決まる！」といった見出しの記事を見つけました。新町橋から下町橋までの約 530m 区間の老朽化した左岸側護岸を改修するとのことで、町並みのシンボルとなっている景観がどうなるのか気になって 10 月下旬に見に行ってきました（写真-1 および写真-2）。

八鹿町仲町区では、昭和 34（1959）年の伊勢湾台風※1 による洪水で八木川が決壊し、家屋流失をはじめ八木川沿いの八鹿町中心街が浸水し甚大な被害が発生しました。その後、災害復旧工事により護岸が整備されましたが、60 年が経過して老朽化してきたため、今回既設護岸の上に厚さ 15cm のコンクリートを張る護岸保護工事が実施されました。

工事は令和２（2020）年度末に完成していますが、完成後まだ日が浅いため張コンクリートの白さがやけに目につきます。ただ、化粧型枠使用による表面の凹凸が白さを和らげており、3～4 年も経てば落ち着いた色合いになって周囲の景観に溶け込んでいくものと思われます。

写真-2 仲町歩道橋から撮影（令和３年10月）

※1 伊勢湾台風：昭和 34（1959）年９月 26 日に潮岬に上陸し、紀伊半島から東海地方を中心にほぼ全国にわたって甚大な被害をもたらした台風である。伊勢湾沿岸の愛知県・三重県での被害が特に甚大であったことからこの名称が付けられた。死者・行方不明者の数は 5,098 人を数え、明治以降の日本における台風の災害史上最悪の惨事となった。犠牲者を 3,000 人以上出した台風として、室戸台風、枕崎台風とあわせて昭和の三大台風に挙げられ、その中でも最悪の被害をもたらした。災害対策について定めた災害対策基本法は、この伊勢湾台風を教訓として成立したものである。なお、伊勢湾台風時の兵庫県内の死者・行方不明者数は 16 人。

■ 昭和 34 年の伊勢湾台風で八木川護岸が被災

伊勢湾台風による八鹿地区の被災写真が掲載されている『写真集 八鹿町の移り変わり』を自治協が所蔵されているということで、11 月中旬自治協にお伺いして複写させていただきました。写真集に記された伊勢湾台風による被災状況は、概ね以下のとおりです。

昭和 34（1959）年９月 26 日、超Ａ級と報じられた伊勢湾台風の風を伴う豪雨は大洪水となり、午後６時頃各河川は氾濫し、午後７時、八鹿町中心部 700 世帯に退避命令を発す。水魔は人力を凌駕し、次第に被害の度を加え、ついに古老も知らぬ大水害となり、死者・行方不明者４人、家屋全壊・流失 13 戸、その他半壊・浸水を含めた家屋の罹災 1,551 世帯は、町の全世帯数（3,119）の約 50%に及び、農地農作物の災害を加えると実に 80%以上の世帯が被災するという大災害となった。特に八鹿町は、円山川の上流に位置し、本流・支流とも急流であるため、単なる浸水ではなく、中心部の県道ですら、あたかも急流河川のさまを呈し、“流し去る”という状態であったために、被害総額６億円以上と実に甚大であった。

写真-3 八木川護岸決壊・家屋流失（仲町）

写真-4 屋岡橋上流の家屋流失状況

（『写真集 八鹿町の移り変わり』から引用）

■ 「大正ロマン漂う町」の今

養父市は、平成 16（2004）年４月に養父郡４町（八鹿町・養父町・大屋町・関宮町）が合併して成立した市です。その昔、旧八鹿町の中心は八木川が円山川に合流する地点付近に位置し、山陰街道、豊岡街道、出石街道が集まり、川の舟運なども合わさる交通の要衝として栄えていました。

明治から昭和にかけて繭（まゆ）の一大集積地であった八鹿地域には多くの商人が集まり、生糸取引で隆盛を誇っていた当時、旧街道沿いには「うだつ」の上がった商家が数多く建てられました。「うだつ」は、元々延焼を防ぐために屋根の両側に設けられた防火壁のことですが、時代とともに富の象徴へと変化していきました。「うだつ」には２種類あって、大屋根の上に立つのが「本うだつ」、２階の壁から張り出しているのが「袖うだつ」です。

八鹿駅から八木川左岸に沿った旧街道沿いには古い商家の建物が今も残っており、またモダンな建物も点在していることからなかなか趣のある町並みとなっていて、「大正ロマン漂う町」と呼ばれています。

写真-5 本うだつのある建物

（八鹿ふれあい倶楽部）

写真-6 袖うだつのある家

写真-7 旧グンゼ八鹿工場事務所棟

自治協は、写真-5 の八鹿ふれあい倶楽部内に事務局を置いていて、事務局の吉谷さんに聞くと、「最近改築などによって、うだつのある建物がかなり減ってきていて、うだつのある町並みを見に来られた方が、うだつのある民家はどこにあるのか、と尋ねられることがあります」と言っておられました。

また、旧グンゼ八鹿工場跡地には、ホール、公民館、図書館、公園としての機能を備えた複合施設「やぶ市民交流広場」が令和3（2021）年９月にオープンし、軒が連なる旧街道沿いとは違って、広大な敷地にゆったりとした空間が誕生しています。

写真-8 八木川沿いにオープンした「やぶ市民交流広場」

■ 八鹿ふれあい倶楽部前に建つ「八鹿町道路元標」

一般県道 169 号八鹿停車場線・屋岡橋を、右岸から左岸に渡って突き当りに「八鹿ふれあい倶楽部」の建物があり、その前に「八鹿町道路元標」と刻まれた高さ縦横 25cm、高さ 76cm の石柱があります（写真-9）。

写真-9 八鹿町道路元標

道路元標は、旧道路法（大正８年法律第 58 号）制定後、同年 11 月に制定された道路法施行令で３条にわたって規定されたもので、その内容は、「府県庁、師団司令部、鎮守府、郡市役所または町村役場の所在地を国道、府県道、または郡道の路線の起終点とするときは市町村における道路元標の位置によるものとする」とし、各市町村に一基ずつ道路元標を設置することとされていました。

さらに、大正 11（1922）年に、道路元標の形状、規格、材料など細目が規定された内務省令が発布されています。

設置場所は知事が指定することとされており、ほとんどは市町村役場の前か市町村の中心となる主要な道路同士の交叉点に設置されています。そして、道路の起終点を市町村名で指定した場合は、道路元標のある場所を起終点としていました。

道路元標の大きさは縦横 25cm、高さ約 63cm の直方体で、一般に頂部が弧を描くように丸く削られた形状をしており、材質は花崗岩で製作されているものが多かったようです。

兵庫県においては、大正９(1920)年、兵庫県告示第225号により道路元標の設置場所が決められています。当時の八鹿町役場は、八鹿小学校西側にあるハローワーク八鹿の場所にありましたが、八鹿町の道路元標は役場から530m東に行った位置に設置されています。

ではなぜこの位置に設置されたのでしょうか。明治12(1879)年、姫路港から生野、八鹿、豊岡を通って津居山港に向かう県道改修事業の一環として、宮越の交差点(図-１参照)から京口を通り屋岡橋を渡って現在の八鹿ふれあい倶楽部に至る道路が整備されました。その結果、八鹿ふれあい倶楽部前が、豊岡・鳥取・姫路を結ぶ但馬交通網の重要な結節点、つまり「町の中心となる主要な道路同士の交叉点」になったことから、ここに道路元標が設置されたようです。

また、八鹿ふれあい倶楽部のある場所は、明治24(1891)年に八鹿警察署が建てられ、その後、明治41(1908)年に八鹿郵便局となり、平成14(2002)年に、高齢者福祉の拠点施設として八鹿ふれあい倶楽部が建てられています。建物は、町並みにマッチするように本うだつの上がったものになっています。

■ 屋岡橋、橋名の由来は？

自治協には屋岡橋を渡って行くのですが、なぜかこの橋の読み方が気になって、親柱を見ればわかると思い、橋の四隅にあるはずの親柱を探しましたが見当たりません。平成28(2016)～29(2017)年に実施された屋岡橋補修工事の際に親柱は撤去されたのか、２基の旧親柱が左岸袂に橋名板を外された状態で置かれていました。

自治協の吉谷さんに聞くと、「時々、橋の名を聞きに来られる方がいます。橋の名は“やおかばし”です。“やおか”が“ようか”に転訛して八鹿になったそうです。」とのこと。

『ひょうごの地名』によると、八鹿町の町名は、『延喜式神名帳』の「屋岡神社」に由来するとされていて、「屋岡」とは八鹿の町並みの北の岡を指し、屋根型の尾根のある地形を示す地名だとか。屋岡神社は養父市役所のすぐ南にあり、上古この辺りは「屋岡の里」と呼ばれていたそうです。

写真-10 屋岡神社

■ 屋岡橋今昔

自治協で見せていただいた『写真集 八鹿の移り変わり』に昔の屋岡橋の写真があったので、『但馬の昭和』および『但馬今昔写真帖』に掲載されていた屋岡橋の写真と合わせて、屋岡橋の変遷を整理してみました。

生野から津居山に至る県道改修の議が明治11(1878)年におこり、明治12(1879)年11月28日に屋岡大橋(木製、上部は二重の板張り)の開通式が行われています。

そして、大正７(1918)年には鉄製Ｉ桁の屋岡橋が架けられ、橋面は当時但馬で初めてのアスファルト舗装だったそうです。この屋岡橋の親柱には、「大正７年２月修之」と刻まれています。

写真-11 屋岡橋竣工式の様子
(大正７年２月)(『八鹿の移り変わり』から引用)

写真-12 昭和９年室戸台風時の
屋岡橋(『但馬の昭和』から引用)

写真-13 屋岡橋を俯瞰する
(昭和14年)(『但馬の昭和』から引用)

昭和９(1934)年９月の室戸台風による出水で屋岡橋は被災しています(写真-12)。

そして、昭和14(1939)年に撮影された写真-13を見ると、橋脚がコンクリート型式に変わっているので、恐らくこの間に架け替えられたと思われます。

以後、昭和 29（1954）年、32（1957）年、40（1965）年頃の写真も同じ橋です。

では現在の屋岡橋は、いつ架設されたのでしょうか。橋梁台帳によると昭和 36（1961）年架設となっていますが、それだと昭和 40（1965）年頃の写真と整合しません。

もし昭和 43（1968）年 4 月以降に架けられたのであれば河川管理施設等構造令（案）が適用され、八木川の川幅は 30m 以上あることから最小径間長は 15m となり、現在の橋（径間長≒12.2m）は許可されないはず。

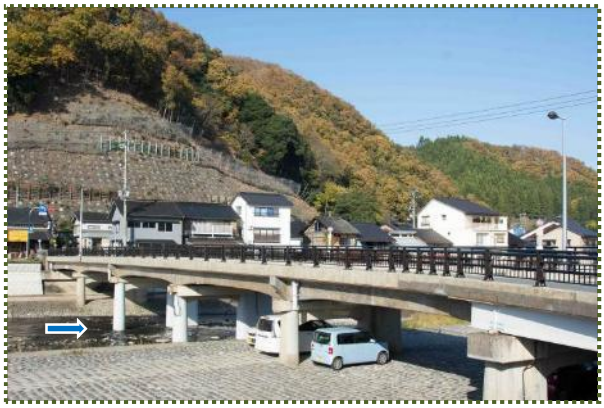

写真-14 屋岡橋（令和３年 11 月撮影）

地元の方の話も踏まえると、恐らく現在の屋岡橋（併設された歩道を除く）本体は昭和 10（1935）～14（1939）年頃に架けられたのではないでしょうか。なお、屋岡橋の型式は 3 径間連続 RCT 桁＋単純鋼合成桁＋単純 RC 床版橋、橋長は 73.35m、幅員は 7.02m（車道 5.52m、歩道 1.5m）です。

■ モノローグ

有名なピアニスト舘野泉さんの一言で見直された風景「酒蔵と煉瓦煙突と八木川の流れ」のある養父市八鹿町八鹿地区は、平成 16（2004）年３月、県の歴史的景観形成地区に指定されました。その後、平成 29（2017）年養父市景観条例施行に伴い市指定に移行、養父市景観計画において「景観形成重点地区」に指定されています。

旧街道を歩いてみると、景観に配慮した民家の新築・改築が見受けられますが、養父郡酒造跡の仕込蔵のような用途廃止した建物の維持については、条例に基づく規制・誘導策だけでは難しいようです。

マサキ（柾・正木）

ニシキギ科ニシキギ属の常緑低木。樹高は 1～5m になる。葉は、短い葉柄をもって対生し、葉身は倒卵円形から楕円形で、長さ 3～8cm、幅 2～4cm になり、厚く革質で強い光沢がある。花期は 6～7 月で緑白色の小さな花を多数咲かせる。秋に柄のある球形の果実が実り、4 裂開して橙赤色の仮種皮に覆われた種子が現れ、熟すと淡紅紫色になる。冬でも裂開した果実が残っている。刈り込みに強く、密生することから、生垣や庭木としてもよく用いられる。八鹿駅の南約 500m 付近で撮影。

写真-15 マサキ

【参考資料】

1 『ふるさと通信 第 61 号、第 68 号、第 103 号』 八鹿地区自治協議会
2 『写真集 八鹿の移り変わり』 八鹿ライオンズクラブ PR 委員会編集　昭和 63 年２月
3 『但馬情報特急～八鹿駅編』 公益財団法人但馬ふるさとづくり協会　令和２年９月
4 『伊勢湾台風、道路元標、マサキ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
5 『八鹿道路元標』 八鹿地区自治協議会 HP
https://www.yoka-jichi.com/knowledge/20161122170821/
6 『ひょうごの地名』 吉田茂樹　昭和 58 年３月
7 『神社記憶～屋岡神社』 玄松子の記憶 HP
https://genbu.net/data/tajima/yaoka_title.htm?print=on
8 『写真アルバム 但馬の昭和』 樹林舎　平成 25 年 12 月
9 『但馬今昔写真帖』 郷土出版社　平成 18 年２月